50　東京府病院（明治7年～14年）における医師の月給

稲松　孝思，松下　正明
東京都健康長寿医療センター

2012年に電子化されて公表された東京都公文書館の公文書に基づいて，従来明らかにされてこなかった東京府病院（府下，愛宕下病院）について，医師の給与の面から検討した．

明治5～7年に大久保一翁東京府知事の元で，共有金（七分積金）を原資に『養育院』，皇室下賜金1万円を原資に『東京府病院（府下，愛宕下）』がセットで作られた．後者は，明治6年1月に，営繕会議所（町会所）が設けられていた八丁堀に建設予定が布告されたが，その後，芝の愛宕下に変更され，明治7年5月に岩佐純院長，佐々木東洋副院長，皇室医師の派遣，お雇い米国内科医師，アシミートの陣容でスタートした．建坪が長崎の小島養生所の3倍規模の西洋式病院で東京府の経営による．

岩佐，佐々木が東京医学校に専念した明治7年12月以降は，坪井信良院長（藩立駿府病院 ← 江戸幕府奥医師），牧山脩卿副院長（西洋医学所肝煎 ← 咸臨丸渡米時の船医），織田信重事務担当（静岡藩権大参事 ← 駿府藩中老）と，旧幕府関係者の体制となった．その後，お雇い医師として英国外科医マニング，オランダ内科医ブーケマと通詞を擁し，長崎養生所の三倍規模で，入院費を，部屋，介護人数などにより4等級に分け，外来診療，往診もおこなっており，欧米式の近代病院をめざしている．明治10年には坪井に代わって，長崎の精得館（長崎養生所）院長，長谷川泰（元長岡藩医）が院長に就任している．

お雇い外国人は，米人内科医アシミート（月給150–200ドル），英国人外科医マンニング（月給310ドル），オランダ人内科医ブーケマ（月給350円）で，通弁を高給（月給60円）で雇用，院長（坪井信良），副院長（牧山脩卿）職の月給は100–150円であった．

このほかに8年間に100名を超える医師が雇用されているが，月給70–50円の幹部医師は約15名，30–45円の者12名，20–27円の者17名，12–18円の者31名，5–8円の研修医22名で，無給見学生も約20名いた．当初は月給7円であった8人は，その後昇給し，幹部一中堅医師となっている．ちなみに門番の月給は7円であった．

坪井信良は藩立駿府病院時代からの本邦初の医学雑誌『和蘭医事雑誌』を継続し，マンニングは，西南戦争に従軍する医師のために講義録を出版している．藤田正方の編纂した本邦初の薬局方が出版されている．剖検が行われ，医師開業試験のための教育，産婆教授所，医師寄宿舎なども用意されている．明治8年以降，栗田胤顕医師を養育院医長として派遣し，養育院の医師は病院に在籍させ，重症患者は入院させるなど，医療 - 福祉施設の連携した運営を行っている．明治9年に東京府病院は，深川，浅草に分局を設け，明治10，12年のコレラの流行にも対応していた．明治13年7月に貧民のみを診療するように通達が出され，お雇い外国人医師，幹部医師は更迭され，ブーケマは日本におけるオランダ人お雇い医者の最後となった．明治13年には廃院予定となり，一時発疹チフス流行に対応する避病院として機能したが，明治14年7月31日廃院となった．東京府病院の土地・建物は有志共同東京病院（慈恵医大の前身）に貸与後，払い下げられた．済生学舎，東京府病院，癲狂院，脚気病院の長を兼任していた長谷川泰は，東京府病院長を外れた．

以上，東京都公文書館の公表された資料から，7年間と短命に終わったが，旧幕府関係医師が中心的役割を果たし，教育病院として重要な働きをした東京府病院について，医師の月給を含めて，その実態について述べた．